

ひとり親世帯の子どもの成績の格差の検証—親の子どもへの関わりの差異 に着目して—

建部知則（学習院大学大学院）

これまでふたり親世帯に比べてひとり親世帯の子どもの親の子どもへの関わりは希薄であることがいわれてきた（Downey 1994）。その希薄さがふたり親世帯とひとり親世帯の子どもの教育達成格差の重要な要因の一つといわれてきた。しかし、親の子どもへの関わりには多様な指標があるものの、どの指標においてもふたり親世帯に比べてひとり親世帯の方が希薄であるのか、そうでないのかが曖昧なまま検証がなされてきた（Nonoyama-Tarumi 2017；白川 2010；吉武 2024）。そのため、親の子どもへの関わりがどの程度ひとり親世帯の子どもの教育達成格差の縮小に寄与するのか十分に明らかにされていなかった。そこで、本稿では親の子どもへの関わりを親子の会話頻度、直接的サポート、精神的サポート、学校活動参加頻度の4つの指標を用いて、2点検証を行った。第一に、ふたり親世帯に比べてひとり親世帯の親の子どもへの関わりは4つの指標とも親学歴や世帯年収といった親の階層に関わる変数を統制してもなお希薄であるのかそうでないのかを明らかにする。第二に、4つの指標いずれも希薄であるならばふたり親世帯とひとり親世帯の子どもの成績の格差をどの程度縮小するのかを明らかにする。データは親子関係に関わる質問項目がある点やひとり親世帯のサンプルサイズが大きい点からベネッセ教育総合研究所の「子どもの生活と学びに関する親子調査 2015-2021」を使用する。このデータを使用した結果以下が明らかになった。

第一に、ふたり親世帯に比べてひとり親世帯の親の子どもへの関わりは、母子世帯において親子の会話頻度、直接的サポート、精神的サポート、学校活動参加頻度いずれの指標も希薄であることが示された。他方で父子世帯は親子の会話頻度のみ希薄であり、他の直接的サポート、精神的サポート、学校活動参加頻度は有意な差が示されなかった。この結果からふたり親世帯に比べた親の子どもへの関わりは、どの指標によっても希薄であるのは母子世帯であり、父子世帯は当てはまらないことが示された。また、母子世帯の親の子どもへの関わりの希薄さは親学歴や世帯年収のみに還元できない。第二に、ふたり親世帯とひとり親世帯の子どもの成績の格差は親子の会話頻度のみによって縮小することが示された。この結果からふたり親世帯とひとり親世帯の子どもの教育達成格差の重要な要因の1つとされてきた親の子どもへの関わりは、その指標すべてが重要なのではなく、一部の指標だけが重要であることが示唆される。